



未来を夢見て

2020/9/15 No. 35

目で話を聞く 学習習慣の基本

週末「緊急地震アラート」に驚かされました。すぐに7学年部の先生方とLINEで連絡を取り合い、休日出勤していた徳田教頭先生が学校の様子を報告してくださいました。本校の危機管理マニュアルでは震度4で警戒配備0号になります。大和町は該当しなかったはずですが、7学年部の皆さんの危機管理意識には頭が下がります。先日の校長会議で各学校で緊急時の対応を確認しておくように、と教育委員会から指示があったばかりです。災害は本当にいつやってくるかわからないことが身に染みました。

さて、今週から校内研究が本格的に再開しました。早速月曜日は2年生と3年生で授業研究があり、五十嵐先生、遠藤先生が授業を提案してくださいました。

なるほど、2時間続けて研究授業を見せていただくと、小野小学校の研究で目指していることが浮かび上がってきます。以下は私なりに感じたことです。

まず、板書。日付けとタイトルを丁寧に書きます。そして、学習課題を子供のノートの文字数を考慮して板書し、青い枠で定規で囲みます。

次に音読。五十嵐先生は微音読の後、教材文に印を付けさせます。遠藤先生は一人読みの後、指名読みと繰り返し読ませます。2年生の子供たちも3年生の子供たちも、集中して音読に取り組む様子には感心させられました。

そして、「心情メーター」や「心情曲線」。登場人物の気持ちを数値化して見せる手立てです。2年生では五十嵐先生は読み取る前後のメーターを作成させ、その違いに着目させていました。

お二人の授業を見せていただいて、特に感じたことは、「研究を自分のものになっている」ということです。そして、何より感心したのは、どの子にも同様に声を掛け、包み込むような優しさで授業を進めているところでした。

私は、小学校の研究では学級づくりがベースにあって、そのきちんとした学級づくりができてこそ、研究の手立てが生きる、と信じています。授業でも、五十嵐先生は32人に、遠藤先生は38人に授業の中で何度も机間巡視を行い、声を掛けていました。

そして、その学級づくりで大切な要素の1つに聞くことがあります。遠藤先生の授業では、発表者が「発表します」と話すと「はい」と先生と他の子供たちが応じます。そして、自然に目を話し手につなぎます。いわゆる「目で話を聞く」です。簡単なようですが、この習慣は全校で取り組まなければなかなか徹底できません。ただこの文化は何か小野小学校の潜在的なカリキュラムの1つとして残したいものです。

同学年の先生のために先行して授業をしていただいた五十嵐先生、遠藤先生。お疲れ様でした。



(文責：手代木)